

中学校に資料を提供し、学力向上を図るための推進力になっている。

6 研究学校

本県の県立学校を指定の対象とし、新教育課程の実施に伴う問題点、および当面する学力向上の問題点を解明するため、各教科学習指導ならびに現職教育の充実の観点にたった実践的研究を行ない、その研究成果を広く県内各学校に普及し、本県の学力向上に資する目的をもって研究学校を設置している。

本年度研究学校指定は次の7校である。

福島県立福島盲学校	第2年次継続指定
福島県立福島ろう学校	同上
福島県立郡山西工業高等学校	40年度新規指定
福島県立須賀川高等学校	同上
福島県立大沼高等学校	同上
福島県立四倉高等学校	同上
福島県立小高農業高等学校	同上

研究学校では、研究学校設置の目的に沿うとともに、それぞれ学校の実態に即応して、より具体的な研究主題を設定して研究を進めた。以下研究指定校の研究結果の概要を記すこととする。

1 福島県立福島盲学校

(1) 研究主題 盲児童生徒の代償行動の実態調査とその指導について

視覚障害から「孤独」「自己中心的」「閉鎖的」になりやすい。このような性格のマイナスの面がやがて盲人の人間性となり、いろいろな場に不適応な行動を生じ、欲求不満を起し易い。このような不適応からくる代償作用を調査し、よりよい人格形成のための資料を得る目的で研究を行なった。

(2) 研究成果

昨年度の研究結果をもととして、次の研究を進めた。

① 調査・観察結果から望ましい行動、望ましくない行動をとる者の発育歴を調べた。

② 代償行動の実態を調べ、一般的傾向をはあくした。

調査対象 本校・小学部4年～専2

福島四小、四中、県立福島農蚕高校
調査内容および方法 家庭、学校、身体、交友、交通、食事、衣服、職業、余暇、舎寮その他の10の生活場面における欲求不満を設定し、それに応ずる代償行動の例をあげ、答えさせた。

結果 個人票一覧表の作成、学校別、設問別に代償行動の割合をだし、一般的傾向を検討した。

③ 教育相談 代償行動の発見、その弊害の除去、学習意欲の向上、学力の向上をはかるために実施した。

(3) 今後の課題 ① 視力差が大きいことと調査対象の少ないことによる資料収集の困難、② 個人指導に限界があること。これらの困難をどのようにして打開していくかがこれからの問題である。

2 福島県立福島ろう学校

(1) 研究主題 言語指導（読話）

読話発達を阻害する諸要素とその実態を知り、指導方法の基礎的資料を作成する。

読話指導は、ろう教育の根底をなす言語指導において中心となるものである。しかし、今日でもこの面に関する研究には残された問題が多いので、およそ次の点を中心として研究を進め、資料を作成する。

- ① 読話の要素的指導、② 読話の基礎力の養成、③ 文字指導の時期、方法

(2) 研究成果

① 性格と読話 小学部には内向性を示すものが多く、感情変易性も高い。これが中学部ではかなり後退し、高等部には両者の中間にあるものが多い。読話との関係でいうと内向的なものは読話成績もよいという傾向がある。

② 知能と読話 小学部と中学部の児童生徒では、順相関を示すが、高等部の生徒では相関度は低いようである。知能指数が中以上だが、読話力が低い児童生徒、また、知能指数が非常に低い児童生徒の読話力をどうのぼしていくかが問題である。

③ 学力と読話 読話力の高いものは学業成績もよい。小学部では学業成績が各教科に開きなく向上するが中学部、高校部に進むにしたがい教科間の開きが大きくなる。

④ 環境と読話 送話者と読話者の距離と向き合う角度により、読話明瞭度には大きな違いが生ずる。両者の距離1m、角度0°の場合に明瞭度は約22%に達する。

⑤ 読話テスト 児童生徒の実態はあくのため小4～高3までの119名に同一問題でテストを実施した。結果を各部別にみると、前回の結果と違って中小高の順となった。

打消や伝聞の形の誤りが多く見られたが、これは概していえば会話回数の少ないもの、音の涉りと前後の語句のかかりの理解があいまいであることに原因があるようである。

3 福島県立郡山西工業高等学校

(1) 課程、学科 全日制機械科、電気科、化学工業科

(2) 研究主題 工業実習の指導はどのようにしたらよいか。

(3) 研究計画および成果

① 本校生徒の学力の実態と学習意欲を調べる。

② 指導計画、指導案を改善充実する。

③ 生徒の学力に応じた学習指導法を検討する。

工業高校としての教育目標と各教科の具体目標を検討し、学習指導の基盤を確立した。また、授業に密接した研究として、「工業実習の指導」を取り上げ、施設、設備の不足している状況のもとで関連科目との融合をはかりながら効果的に実習を進める研